愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第7号, pp.65～72,March,2022

「言葉による見方・考え方」を働かす国語科授業への一視点
―随筆教材「言葉の力」（大岡信・中学２年）を例に―

佐藤　洋一＊　　下岡　光華＊＊

＊名古屋学芸大学ヒューマンケア学部　　＊＊愛知県安城市立安城北中学校教諭

A Perspective on Japanese Language Classes that Make Use of ″Language Perspectives and Ways of Thinking″
-Example of the essay ″The Power of Words″ (Makoto Ooka, 2nd year of junior high school)-

Yoichi SATO*,　Mitsuka SHIMOOKA **

*Nagoya University of Arts and Sciences, Human Care Studies, Nissin 470-0196, Japan
** Anjo-kita Junior High School, Anjo City 446-0041, Japan

要　　約

新学習指導要領では「育成を目指す資質・能力の明確化」とともに各教科を学ぶ価値・意義が重視され、「教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）」を働かせる教育が「各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」「教科等の学習と社会をつなぐ」「深い学びの鍵」と明記されている。また、国語科における「言葉による見方・考え方を働かせる」とは「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」、「『言葉による見方・考え方』を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身につけることにつながる」と記されている。しかし国語科授業の多くは「教科を学ぶ本質的な意義」「言葉による見方・考え方」の解釈の狭さが資質・能力育成の立場からの教材研究や評価観の偏りにつながり、結果的に「教科等の学習と社会をつなぐ」「深い学び」にはいたっていない実情がある。

本稿は「言葉による見方・考え方」を働かせるとは学習者が「何をどうできるようになればいいのか」という資質・能力育成における指導と評価の一体化（学習成果の可視化）の課題に着目し、随筆教材「言葉の力」（大岡信）を例に、「見方・考え方」をいかした深い学びへの視点等を提案するものである。

Keywords：言葉による見方・考え方、国語科授業、随筆、「言葉の力」（大岡信）

Ⅰ　資質・能力の育成と教科を学ぶ意義
―「言葉による見方・考え方」を働かせる授業―

新学習指導要領改訂基本方針で重視されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進の中で、各教科等の「見方・考え方」は「各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐもの」「教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と語られている**注１）**。

これは国語科では、管見の範囲では「教科を学ぶ本質的な意義」「言葉による見方・考え方」の解釈と位置づけ、教材研究や評価観とのつながりの曖昧さ等のため、結果的に「教科等の学習と社会をつなぐ」「深い学び」には至っていないように思われる**注２）**。

本稿は「言葉による見方・考え方」を働かせるとは学習者が「何をどうできるようになればいいのか」という資質・能力育成における指導と評価の一体化（学習成果の可視化）の課題に着目し、随筆教材「言葉の力」（大岡信・中学２年）を例に「見方・考え方」をいかした学びへの視点等を提案するものである。

Ⅱ　「言葉の力」（大岡信）から資質・能力育成へ
１　言葉の本質・機能、豊かさ

教材「言葉の力」（中２、光村図書）は、詩人・大岡信が１９７７年愛知県文化講堂で講演したものを後に書籍化したものを中学生に向けて、桜のエピソードと詩的な感受性、言葉のささやかさが人間全体を「背負っている」という洞察（アナロジー）を取り出し随筆教材として再構成されたものである**注３）**。

『言葉の力』全文は、シュールレアリスム（前衛芸術運動）やフロイト心理学等の影響を受けた現代詩

人・歌人であり、優れた詩歌・古典研究者・評論家としての立場から人格や文体、コミュニケーションの本質と機能に深く関わる言語の豊かな可能性を多面的・多層的に語っている点に大きな特質がある。まず高校国語教材（言語評論、桜のエピソードや中原中也の箇所等）として再構成され、言語と表現を学ぶ短い随筆教材として中学でも教材化されてきた経緯がある。

教科（教材）を学ぶ意義（価値）の明確化＝「見方・考え方」を働かす授業の開発という観点から、『言葉の力』全文の「見方・考え方」を三点に整理する。一つはいわゆる常識的な言語論、言語機能論等に対して大岡独自の見方・考え方（言語論）が述べられている点である。例えば「伝達・表現・認識・創造」「文化・存在」「道具としての言語・認識形式としての言語」等の言語論を踏まえ、これ等とは異なる観点を提起している。実践では「言葉の力・補助資料１～６観点」に整理した資料を開発した（注３）。

二つ目は詩人による独特な感受性と描写力により、人間の本質や物事の真実は見える・聞こえる・触れるものと見えない・聞こえない・触れないものの両者を超えた深層世界への想像力（＝内なる創造力）によってしか感じることはできないことを効果的なエピソードの選択と構成、描写で語っている（フランス語の概念・ギフト、平安時代の和歌、氷山と言葉・無意識、ノバリース、中原中也、桜の染色と木等）。

三つ目は大岡信の伝統文化や古典、海外の詩歌等に詳しい研究者、評論家の立場・専門性をいかした提言の現代的価値の側面である。開発した「補助資料１～６観点」も合わせて読むことで「言葉と他者・世界理解」「言葉と人格・文体・人間性やコミュニケーション論」「随筆というテクスト表現形式の魅力」「伝統文化や国家・歴史との関わりで言葉を学ぶ」等への視点を得ることができる（資料３・６参照）。

２　「言葉の力」を生かす「見方・考え方」とは

授業では「言葉の力・補助資料１～６観点」を複数のテクスト・情報の読解から批評する力、課題発見・解決能力育成へのステップとして活用した。教科書教材の価値（「見方・考え方」）を確認する。

一つ目は、中学２年６月の時期、「言葉」の意義・価値、多面性・多層性を改めて問い直し、自分の生き方と関連させ向きあう契機にできることである。言葉の本質が語る人を「背負っている」という新たな価値を語るテクスト内容としての側面である。

二つ目は、随筆というテクスト形式による表現の特性を学ぶ側面である。作者のメッセージは短い文章だが論理的な枠組みと作者独自のエピソード・描写等によって常識的な言語観への批評（美しい言葉）と提言が語られている。特に、桜の染色の印象や作者独特の感性や感覚（驚きや感動等）を生き生きとした描写には大岡の詩人としての感受性と描写力、体験・エピソード（具体例）の選択と構成力が現れている注４）。

三つ目は、身近な話題を取り上げての課題発見・解決（パフォーマンス課題）のモデルとして活用できることである。「補助資料１～６観点」も参考にし「言葉」について改めてその意義や価値を見つけ解釈する、実践では「今も心に残る『言葉』の思い出をエッセイにまとめよう」との随筆創作へ繋げたことである（資料５）。日常会話やＳＮＳ、書籍やメディア等多様な「言葉」の中で日々を過ごす生徒達にとって、言葉の本質について問い続けることは自分らしい生き方を創っていくために必要な機会の一つとなる。

Ⅲ　単元への視点―複数の情報批評・課題発見へ―

１　日本の子どもたちの読解力、資質・能力育成

学習到達度調査ＰＩＳＡ２０１８結果から、日本の小中高校生・大学生の汎用的な「読解力」の課題が指摘されている。新学習指導要領の枠組みとＯＥＣＤ生徒の学習到達度調査・ＰＩＳＡ２０１８の関係性については「別のもの」との見解もあるが、これ等はデジタル時代の読解リテラシ―、汎用的な資質・能力育成の教育課題につながると読むこともできる。例えば、今回ＰＩＳＡ２０１８で問われたのは日本の小中高校生等が苦手な以下の事項であった（注２・５）。

（１）複数の情報・テクストを比較し的確に読解する
（２）提示された観点や自らの課題意識から批評的に分析解釈、考察し評価する
（３）論理的に効果や説得力、条件等を考慮し考えを論述・評価すること

２　読解・解釈から「考えの形成」「表現」「共有」

授業では教材がもつ本質的な意義や魅力（「見方・考え方」）を、教材理解（習得）を「活用・探究」へと結びつく形式の特徴や学び型・学習方略の発想から単元構想を行った。「一つの教材の詳細な読解」に終始するのではなく複数の資料・多面的多層的な論点を読み比べ、作者の課題意識を考察し、構造・表現形式等のテクスト形式面での工夫や効果等を考慮し、効果的に論述する学び型・方略を学べるよう構成した。

さらに、学びと自分の経験を結びつけ「随筆を書く」パフォーマンス課題を設定することで（「活用・探究」へと展開）、自分の認識や価値観を問い直す機会とした（資料６）。友達の考えを知り再構築したりする場を確保することで、自己表現が苦手な生徒も表現する楽しさや自分にない考えに出会うことができる。

Ⅳ　「言葉の力」（大岡信・中学２年）の授業実践

１　単元名「言葉」の思い出をエッセイにまとめよう
―国語科・複数の情報活用から主体的な探究へ―

２　単元目標と評価規準・学習過程（１０時間、概要）

（１）言葉の本質や価値についての複数の情報（教材及び補助資料の解釈）を通し多様な情報を比較し

ながら読み解く楽しさを知ることができる。

（習得１―「知識及び技能」）**資料１・２**

（２）随筆というテクスト形式を知り説得力のある構成と文体、個性的な感受性や想像力を味わう。

（習得２―「知識及び技能」）**資料４**

（３）言葉の本質や価値を効果的に伝える構成やエピソードの選択、効果を考えることができる。

（活用・探究―「思考力・判断力・表現力等」）

資料３

（４）心に残る言葉の思い出を随筆の構成と効果的なエピソードを生かしまとめることができる。

（活用・探究―「思考力・判断力・表現力等」）

資料５

（５）随筆の創作を通し言葉の本質や価値を問い直し生き方を再構築しようとすることができる。

（振り返り―「学びに向かう力、人間性等」）**資料６**

３　実践の概略とポイント（１０時間完了）

（１）言葉への問い、テクストの読解、学習の見通し

導入では「忘れられない言葉ってある？」と問いかけ、教師自身の心に残る言葉を紹介した。生徒達は身近な人から言われた一言や好きな漫画の名シーン、著名人の名言、歌詞のワンフレーズ等を挙げた。過去に言われて傷ついた経験をもつ生徒、「言葉」というテーマは今まで考えたことがないという生徒もいた。これから学びたいことの記述では「級友がどう考えているのか知りたい」「自分の考えを効果的・魅力的に伝えるにはどうすればよいか」等の問いが立てられた。

「言葉とは何か」という課題意識と「自分の体験・経験、感動を効果的・魅力的に表現したい」という切実感を軸に、「教材を生かし自分の思いを表現するために学んでいこう」と単元のゴールと学習の見通しをもたせた。初発の感想では「えもいわれぬ」「いやおうなし」「精髄」等、作者の用いた表現や文体についての疑問、「そもそもこの文章で作者が何を伝えたいのかよくわからない」「説明文でも文学でもない気がする」といった価値ある気付きも見られた。

（２）学習シートの開発「補助資料１～６観点」

習得１・２の学習段階では情報を正確に読み解くための学び型・方略を全員に身に付けさせた。まず随筆というテクスト形式の特質を既習「枕草子」との関連から説明し読むためのポイントを提示した**（資料１）**。他には、１作者の専門性・課題意識の確認、２「桜の色を何と表現しているか抜き出す」「桜の幹・樹液・樹皮が人間の何と同じか」、３「学習シート」を用い文章の構成を視覚的に把握、作者のメッセージや個性的な描写、象徴的な言葉をイメージ化等**（資料１・２）**。

しかし「なぜ桜のエピソードが言葉につながるのかまだよくわからない」「自分が作者なら言葉という目に見えないものをもっとわかりやすい例えで表現する」といった感想もあった。そこで『言葉の力』（出典）から大岡信が語っている言葉の本質や多面性・多様性を６観点に整理した補助資料を提示した**（資料３、注３）**。複数の情報を比較して読む学習活動を加え多様な情報を読み解く楽しさと方法を知り、作者の語る「言葉の本質」に対して考えを持てるようにした。

（３）複数のテクストの比較、ＩＣＴの活用等

言葉と言葉の関係性に着目し教材と補助資料の文を読み比べることができるよう、タブレットの発表ノートに二つのテクストを配付した（詳細は略）。

生徒は「言葉を氷山の一角という表現で例えたことがわかりやすい」「見えない部分と見える部分がイメージしやすい」という意見、「教科書の文は言葉について説明するために桜を例えとして出している、補助資料は氷山を例えとして出している」という二つのテクストの共通点に注目した生徒、「桜の例えは作者のリアルな実体験、氷山の例えはわかりやすく説明するための事例にすぎない」という相違点に注目した生徒もいた。このように内容の価値と形式の効果に着目することで、随筆特有の実体験（エピソード）の効果について解釈できることを伝え全体で話し合った。

「桜と氷山の事例の良さは何か話し合おう」と発問し、教科書本文と補助資料の言葉を根拠に生徒の意見を板書にまとめた。事例選択と表現の効果へと話題を焦点化するために、「この二つの事例の一番の違いは何か」と問うと、「桜の例えは、作者の実体験（エピソード）」、そこに大岡信の感受性やものの見方・感じ方、その人らしさ（人生観・価値観、生き方）、感動や発見、印象（イメージ）が表現されており、それがこの教材の魅力（内容価値）であることを確認した。また、「言葉は発した人を反映する」という主張が「考察・結論・一般化」や題名「言葉の力」の持つメッセージとつながり、作者の表現の巧みさ（形式の効果）であることにも気づかせた。

（４）創造的な随筆創作（パフォーマンス課題）

単元全体を通し「今も心に残る言葉を思い出そう」をテーマに随筆を創作し発表・批評することをパフォーマンス課題として位置づけた**注６）**。「私も言葉と出会った時の実体験を入れ説得力が出るように書きたい」「はじめとなか、まとめ、むすび・主張の部分がつながるような言葉を入れたい」との振り返りを紹介し意欲付けを図った。書くことに苦手意識をもつ生徒には論理的文章構成の型を活用した構成メモで支援した。言葉と出会ったきっかけから書き始める生徒、使用した学習シートを読み返す生徒等、学びを生かし書こうとする姿、タブレットを活用し自分の主張に合う、より効果的な言葉を探究する姿も見られた。本単元での学びをこれからの生き方や新しいものの見方として取り入れようとしたり、主体的な意思決定や自分らしい態度形成、判断・実践につなげたりしていこうとする感想も見られた（資料６）。

Ⅴ　まとめにかえて―言葉の再考、随筆の創作―

本実践は下岡の勤務する中学２学年４クラス１５２名（２０２１年６月）を対象に行った。９６％の生徒達が随筆を書き、自分の生活経験や友達・人間関係との関わりの中での「言葉」について批評することができた。生徒の随筆には「諦めたらそこで試合終了、自分を支えてくれた漫画の名言」や「ささやかな日々の中に、忘れられないあの日の言葉」等、実体験と言葉との出会いを見つめ直している（**資料５**）。

随筆には教材の「○○は△△と同じような気がする」「○○は△△だと言っていい」というアナロジーを生かし考察をまとめる生徒、「○○が脳裏に揺らめいた」「体が一瞬揺らぐような不思議な感じ」等の描写を使って自分の思いを語る生徒も見られた。

随筆創作後の交流会では、「共有」から「考えの深化」を目指し、振り返り・メタ認知化のための学習シートを開発した（略）。①タイトルや話題の出し方（問いかけ方）は興味がわく魅力的なものか、②「はじめ・なか・まとめ＋結び」の「型」を生かしまとめられているか、③作者独自のエピソード（経験）や感受性がわかりやすく語られているか、④「はじめ・なか」と「まとめ・結び」に整合性（一貫性）や説得力はあるか、⑤自分の生き方や価値観・メッセージにつながっていたか等の項目を評価のポイントとし、一言コメントやアドバイスを自由に記述できるよう構成した。学習シートは書いたものをどう評価するかの観点が生徒に認知され、生徒同士の交流の様子も活性化した。

４人グループによる交流会のあと代表者による全体の交流会を行ったことで「あの子がこんな文章書いたの」との驚きの声があがったり、級友の個性や思い、言葉の価値を再発見したりする機会となった。学習を終えた生徒の振り返りからは（**資料６**）補助資料と比較して読む学習を加えたことで、随筆の学び型（学力・評価観）や魅力・楽しさ、テクスト形式の解釈・批評へと学びを深めることができたと読むことができる。

資質・能力型の教育への転換とは知識・技能を覚え再生する教育から「主体的で創造的な課題発見・解決能力（探究）」の育成、「個人的・社会的により良く幸せに生きること（Ｗｅｌｌ－ｂｅｉｎｇ　ＯＥＣＤ　Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ　２０３０プロジェクト）」（２０１８）への転換である。これは学習者の「主体性（エージェンシー）」を重視した教育の質的転換であり「何をどう教えたか」より、学習者が「何ができるようになったか」（学修者本位の教育）への教育観・指導観、学習評価観等の転換でもある（「教育再生実行会議・第十二次提言」２０２１年６月参照）。

本稿は大岡信『言葉の力』（全文）から補助資料を作成し言葉の本質と価値、多様な側面についての学習を構成し実践を行った。さらに随筆を書き共有・批評するパフォーマンス課題設定で複数の情報・テクスト理解を「学びに向かう力、人間性等（の涵養）」につなげようとしたものである。

【付記】本稿は「令和３年度安城市教育研究会一斉研修会・国語部会（６月１５日安城北中学校）における下岡光華の研究授業提案及び講演と助言（佐藤洋一）を骨子にしている。本稿における資質・能力論、大岡信「言葉の力」論等の理論的な面は佐藤が、授業構想と実践、補助資料開発等は下岡が行った。

【注記】

1　『中学校学習指導要領解説　総則編』第１章、『同学習指導要領解説　国語編』等（２０１８年）。

2　佐藤洋一「国語教育は資質・能力観型教育に対応できるか」『「楽しく深い学び」を創る国語科授業研究会紀要３号』（２０２０年）、佐藤洋一・加藤洋佑「創造的な『課題発見・解決能力』を育てる探究型国語科学習」（『名古屋学芸大学研究紀要教養・学際編第１６号』２０２０年）等を参照。

3　現行の教材「言葉の力」は１９７７年９月２１日愛知県文化講堂での講演速記に加筆したものが「言葉の力」として掲載された（『思想１９７８年１月』岩波書店、その後『言葉の力（新装版）』花神社１９７９年に収録）。管見ではこの教材による授業の多くが桜のエピソードによる解釈を通した表層的な言語論の読解に終始しているのが実情である。

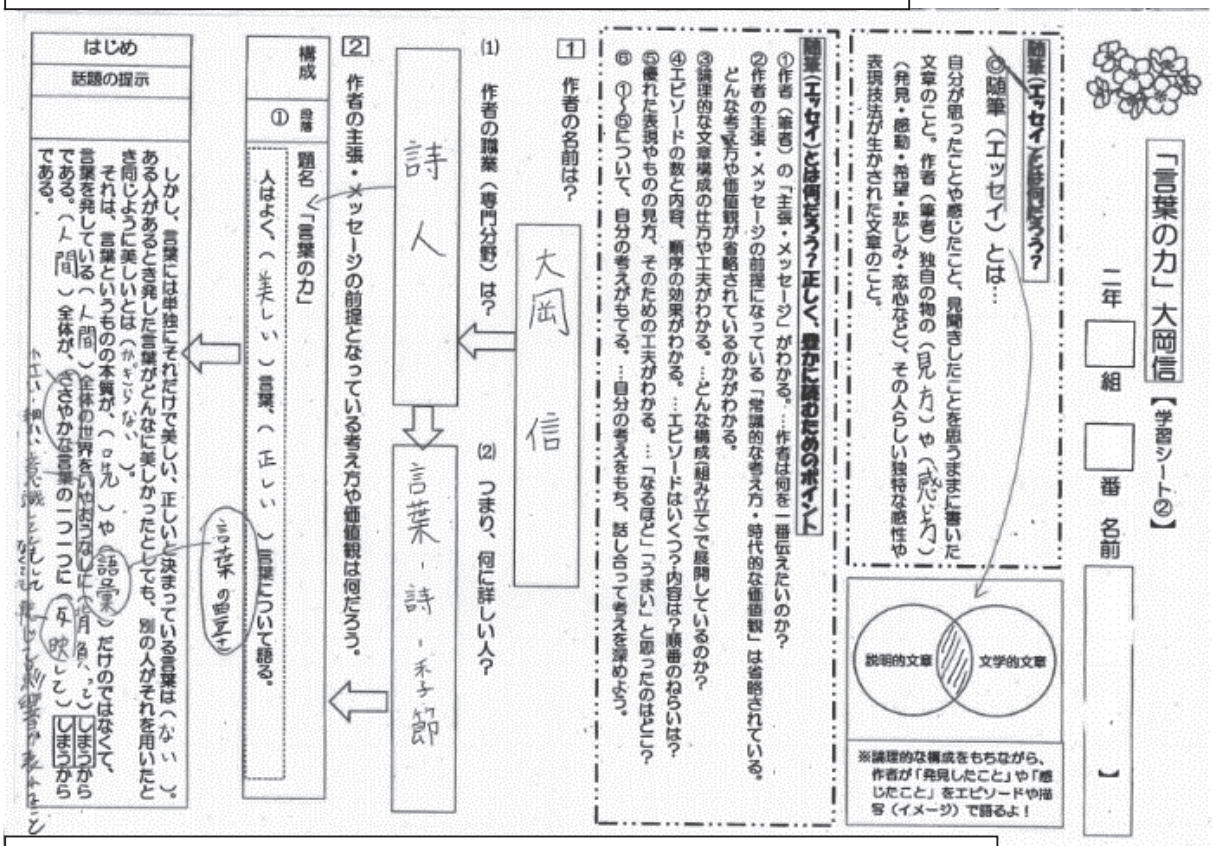
本稿では「Ⅱ」でも述べたように大岡らしい言語論の理解、複数のテクスト・情報を読み解き評価する力、課題発見・解決能力を育成ステップとするため、「言葉の力・補助資料１～６観点」（資料３）を開発した。１～６観点とは１言葉は贈り物、２運命を決める言葉、３ささやかな言葉の力、４ありふれた言葉の組み合わせ、５考えられるものは考えられないものに触っている、６もう一つのコミュニケーションである。「資料３」は「４ありふれた言葉の組み合わせ」の部分のみを提示している。

4　佐藤洋一・有田弘樹「随筆教材のテキスト形式を生かす『習得・活用』『批評』（愛知教育大学研究報告第６３輯，２０１４年）、同「『生き方・価値観』を創造する２１世紀型学習（愛知教育大学研究報告第６４輯、２０１５年）等。

5　「ＯＥＣＤ　生徒の学習到達度調査２０１８年調査（ＰＩＳＡ２０１８）のポイント」（文科省２０１９年１２月９日）。

6　随筆の創作（エッセイライティング）の重要性とルーブリックの詳細は、佐藤洋一・吉川知良「教科を学ぶ本質的な意義（「見方・考え方」）と国語科学習」（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要第１５号、２０２２年）を参照されたい。

資料１　教材（随筆）の読み方の確認及び構成と文体、個性的な感性や想像力を味わうシート



「言葉の力」大岡信【学習シート②】

二年　組　番　名前

随筆（エッセイ）とは何だろう？

◎随筆（エッセイ）とは…

自分が思ったことや感じたこと、見聞きしたことを思うままに書いた文章のこと。作者（筆者）独自の物の（見方）や（感じ方）（発見・感動・希望・悲しみ・恋心など）、その人らしい独特な感性や表現技法が生かされた文章のこと。

説明的文章　文学的文章

※論理的な構成をもちながら、作者が「発見したこと」や「感じたこと」をエピソードや描写（イメージ）で語るよ！

随筆（エッセイ）とは何だろう？正しく、豊かに読むためのポイント

①作者（筆者）の「主張・メッセージ」がわかる。…作者は何を一番伝えたいのか？

②作者の主張・メッセージの前提になっている「常識的な考え方・時代的な価値観」は省略されている。どんな考え方や価値観が省略されているのかがわかる。

③論理的な文章構成の仕方や工夫がわかる。…どんな構成（組み立て）で展開しているのか？

④エピソードの数と内容、順序の効果がわかる。…エピソードはいくつ？内容は？順番のねらいは？

⑤優れた表現やものの見方、そのための工夫がわかる。…「なるほど」「うまい」と思ったのは、どこ？

⑥ ①～⑤について、自分の考えがもてる。…自分の考えをもち、話し合って考えを深めよう。

1　作者の名前は？　大岡信

(1)　作者の職業（専門分野）は？　詩人

(2)　つまり、何に詳しい人？　言葉・詩・季節

2　作者の主張・メッセージの前提となっている考え方や価値観は何だろう。

構成　段落　題名

①　人はよく、（美しい）言葉、（正しい）言葉について語る。

「言葉の力」

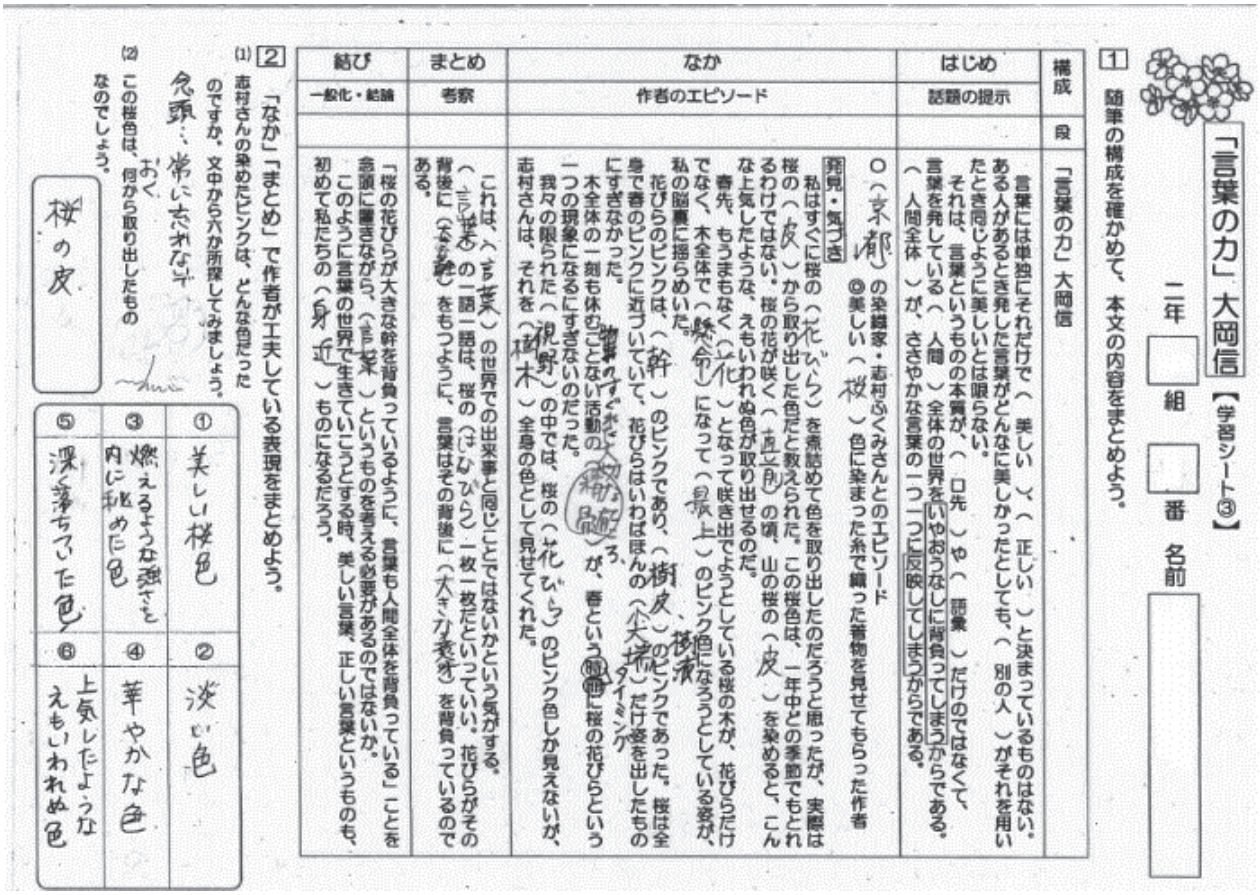
はじめ　話題の提示

しかし、言葉には単独にそれだけで美しい、正しいと決まっている言葉は（ない）。ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、別の人がそれを用いたとき同じように美しいとは（かぎらない）。

それは、言葉というものの本質が、（口先）や（語彙）だけのではなくて、言葉を発している（人間）全体の世界をいやおうなしに（背負って）しまうからである。（人間）全体が、ささやかな言葉の一つ一つに（反映して）しまうからである。

言葉の本質

資料２　教材（随筆）の読み方の確認及び構成と文体、個性的な感性や想像力を味わうシート



「言葉の力」大岡信【学習シート③】

二年　組　番　名前

1　随筆の構成を確かめて、本文の内容をまとめよう。

構成	はじめ	なか	まとめ	結び
	話題の提示	作者のエピソード	考察	一般化・結論
段				
「言葉の力」大岡信	言葉には単独にそれだけで（美しい）や（正しい）と決まっているものはない。ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、（別の人）がそれを用いたとき同じように美しいとは限らない。それは、言葉というものの本質が、（口先）や（語彙）だけのではなくて、言葉を発している（人間）全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうからである。	○（京都）の染織家・志村ふくみさんとのエピソード ◎美しい（桜）色に染まった糸で織った着物を見せてもらった作者 発見・気づき 私はすぐに桜の（花びら）を煮詰めて色を取り出したのだろうと思ったが、実際は桜の（皮）から取り出した色だと教えられた。この桜色は、一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く（直前）の頃、山の桜の（皮）を染めると、こんな上気したような、えもいわれぬ色が取り出せるのだ。 春先、もうまもなく（開花）となって咲き出ようとしている桜の木が、花びらだけでなく、木全体で（懸命）になって（最上）のピンク色になろうとしている姿が、私の脳裏に揺らめいた。 花びらのピンクは、（幹）のピンクであり、（樹皮）のピンクであった。桜は全身で春のピンクに近づいていて、花びらはいわばほんの（小さな花）だけ姿を出したものにすぎなかった。物事のすべてが（複雑）で、春という（時）に桜の花びらという木全体の一刻も休むことない活動の（タイミング）が、一つの現象になるにすぎないのだった。 我々の限られた（視野）の中では、桜の（花びら）のピンク色しか見えないが、志村さんは、それを（樹木）全身の色として見せてくれた。 これは、（言葉）の世界での出来事と同じことではないかという気がする。（言葉）の一語一語は、桜の（はなびら）一枚一枚だといっていい。花びらがその背後に（なる幹）をもつように、言葉はその背後に（大きな力）を背負っているのである。	「桜の花びらが大きな幹を背負っているように、言葉も人間全体を背負っている」ことを念頭に置きながら、（言葉）というものを考える必要があるのではないか。 このように言葉の世界で生きていこうとする時、美しい言葉、正しい言葉というものも、初めて私たちの（身近）ものになるだろう。	

(1)　2　「なか」「まとめ」で作者が工夫している表現をまとめよう。

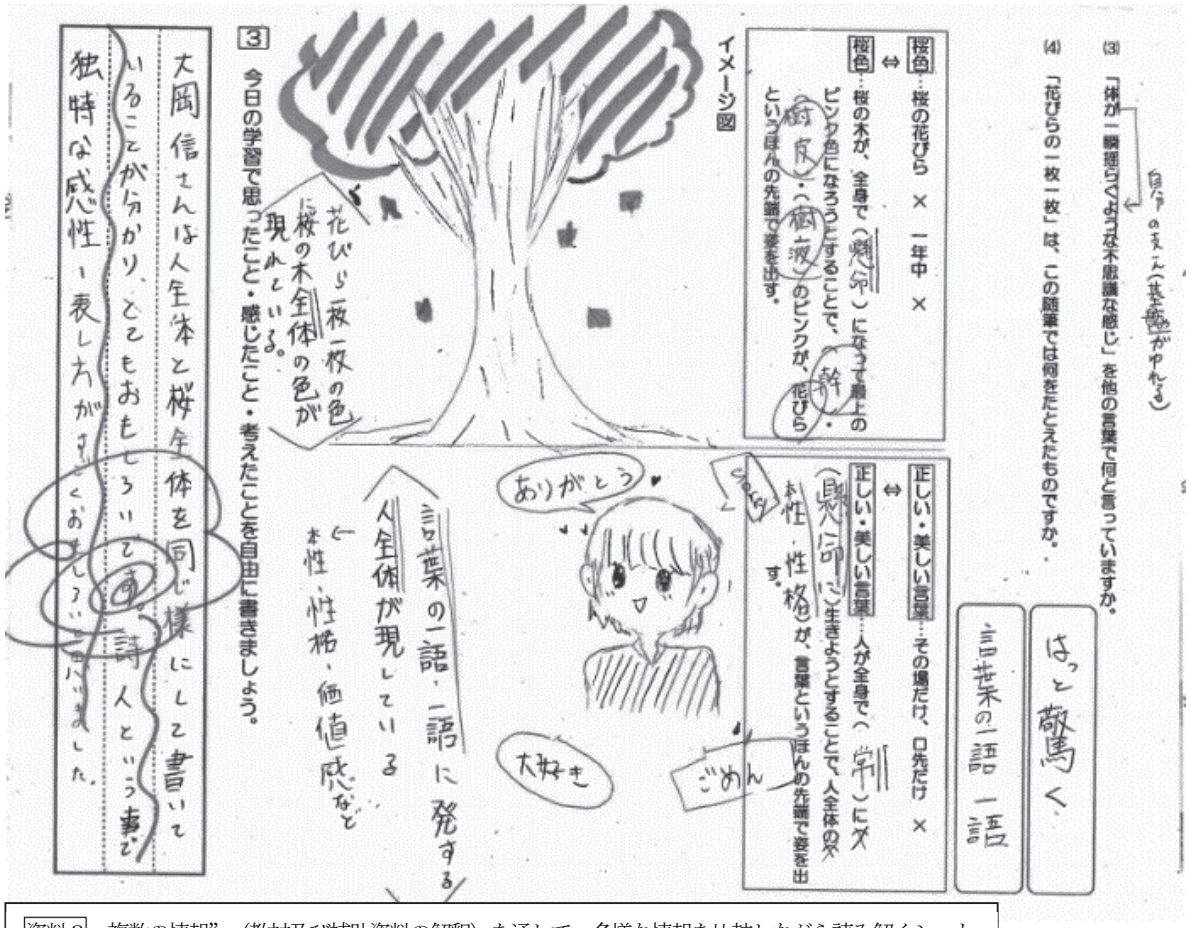
志村さんの染めたピンクは、どんな色だったのですか。文中から六か所探してみましょう。

念頭…常に忘れない　おく

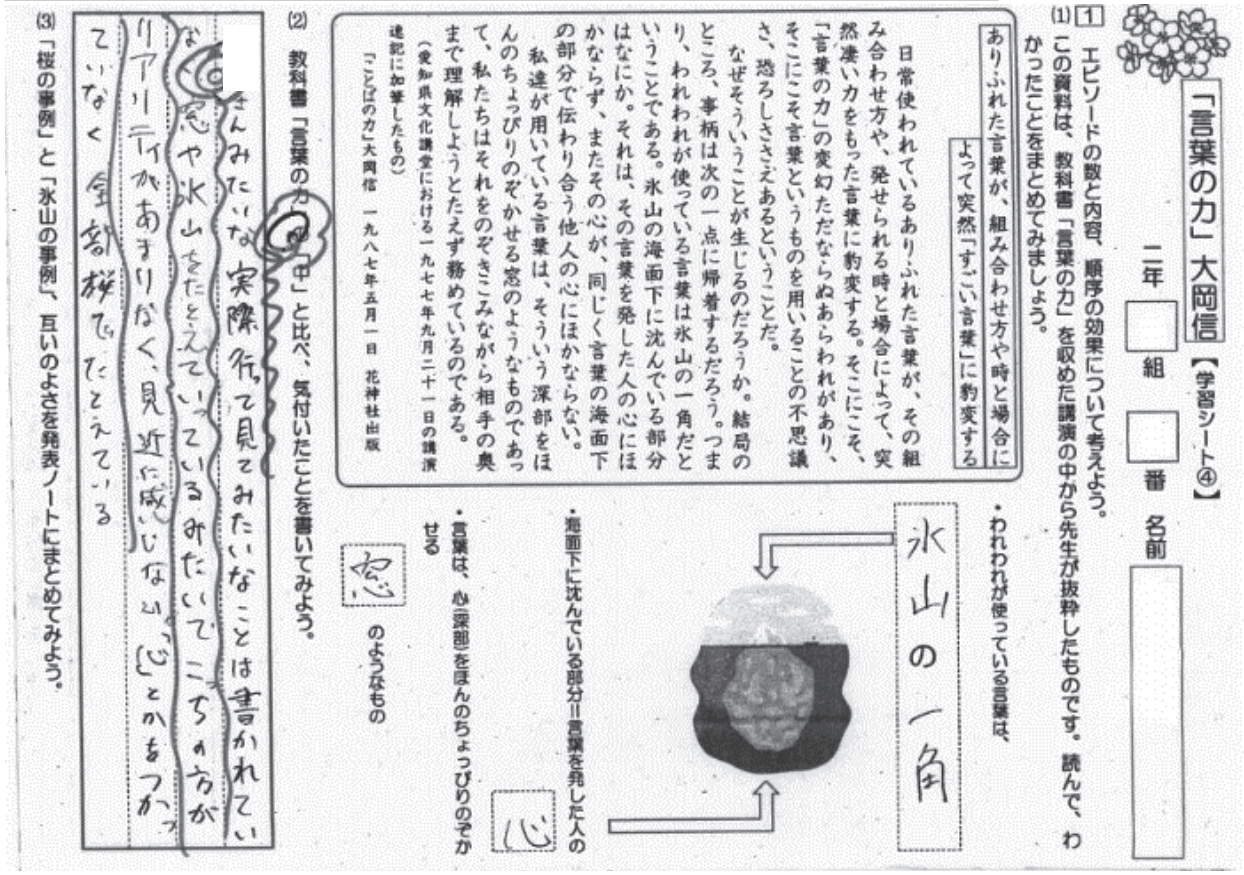
(2)　この桜色は、何から取り出したものなのでしょう。

桜の皮

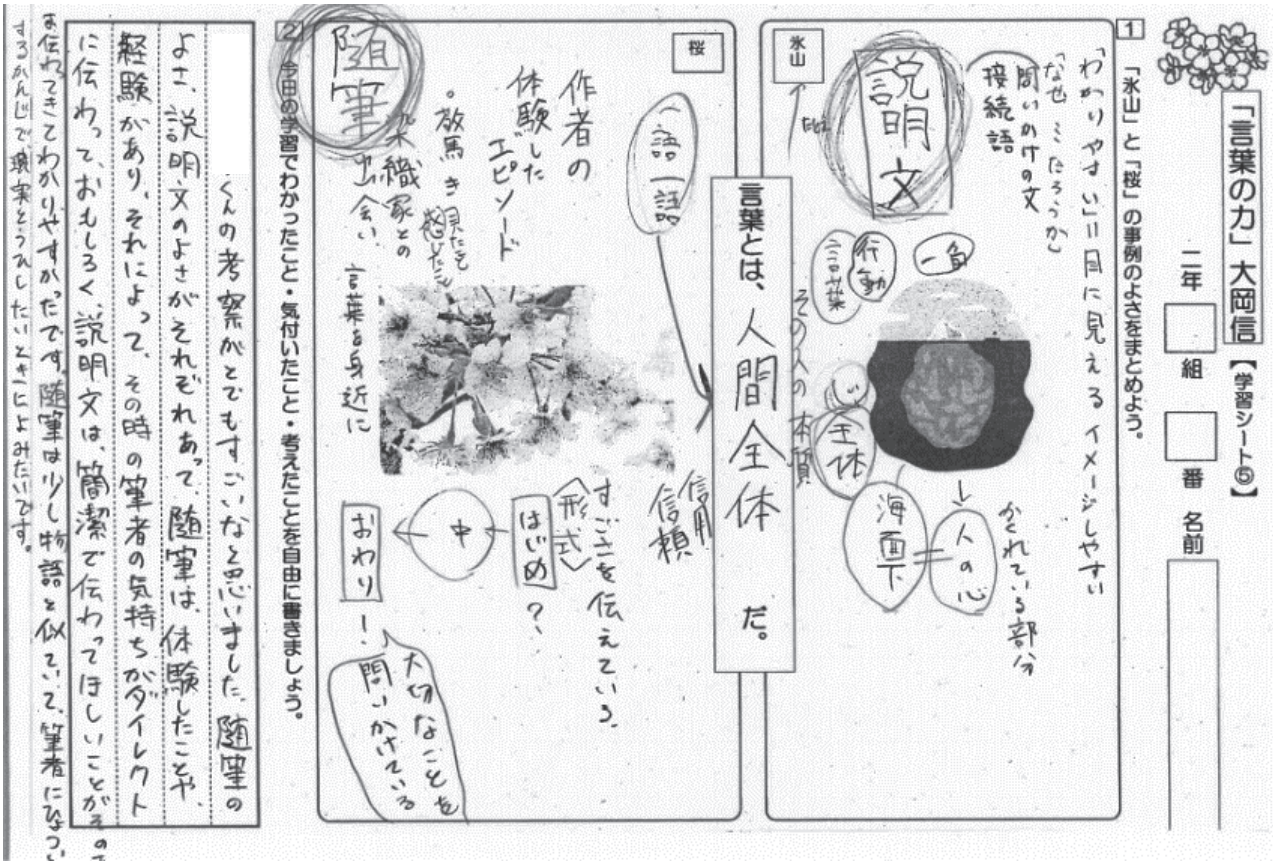
①	②	③	④	⑤	⑥
美しい桜色	淡い色	燃えるような強さを内に秘めた色	華やかな色	深く落ちついた色	上気したようなえもいわれぬ色



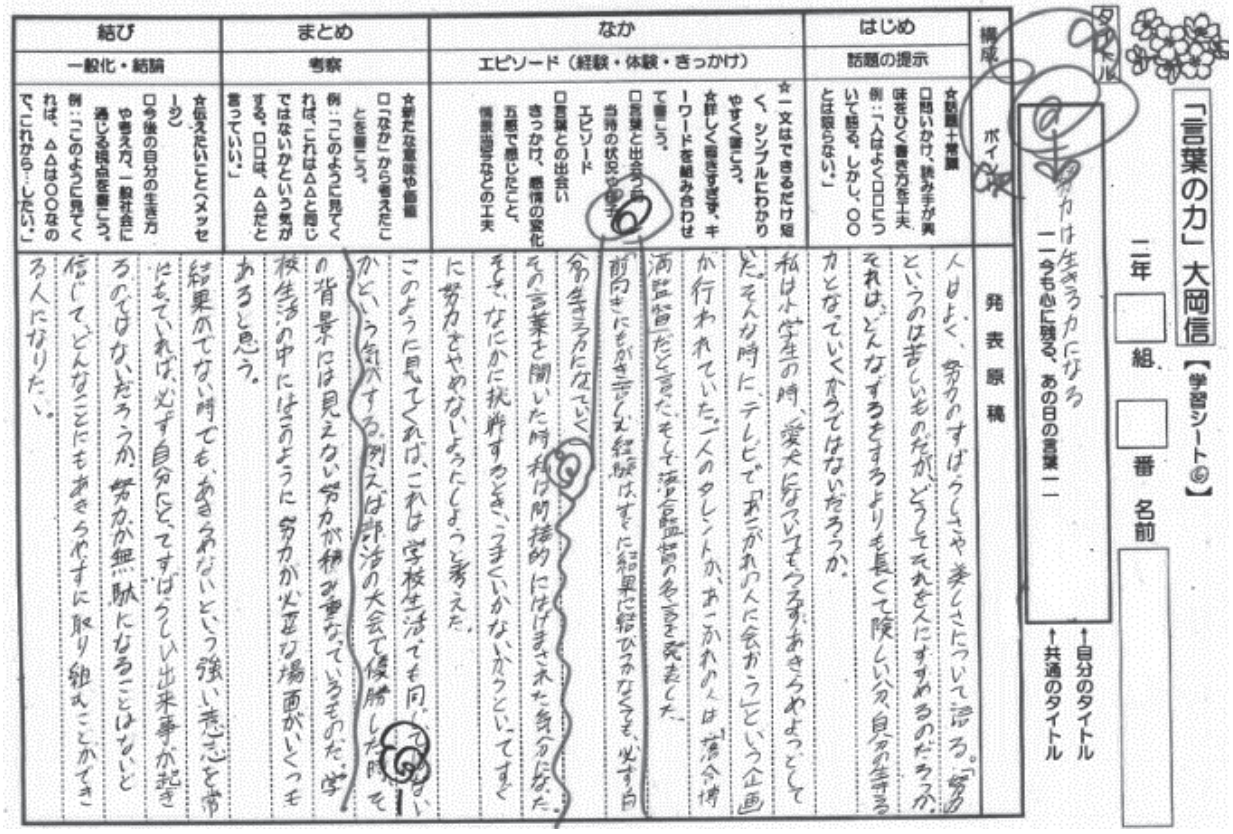
資料3　複数の情報”（教材及び補助資料の解釈）を通して、多様な情報を比較しながら読み解くシート



資料４　作者の考える言葉の本質（主張）を効果的に伝える構成やエピソードの選択（効果）について批評するシート



資料５　「今も心に残る言葉の思い出」をテーマに、随筆をまとめる構成シート



資料6　本実践提案における生徒の振り返りの一部

1　わかったこと（学んだ中で説明できること等）

①　随筆は、作者が発見したことや感じたことが語られた文章だということがわかりました。始め、なか、まとめ、結びという構成を知って、文章を読んだり書いたりしてわかったことは、体験（エピソード）の大切さです。感じ方、見方は人それぞれなので、その人らしい独特な感性を生み出すことができ、おもしろく読みたくなる文章にすることができると思いました。

②　随筆は、体験したことをベースに考え方や人生についての大切なことに広げ、テーマに対する疑問や答えを入れることで、興味をひいていることがわかりました。今回の学習は自分が一番楽しかったと思えるものがありました。正直、随筆で書いた内容は僕自身の人生の分かれ道だったと思える出来事だと気づきました。

③　随筆では、体験を語ることで自分の気持ちと似ている部分や対照的な部分を見つけられ、物語文や説明文とはちがう興味がわきました。作者は同じ「言葉」を何かに例える時に、桜や氷山、窓など、様々なものを状況に合わせて使い分けているところから、自分が何を誰に伝えるかによって「これは…と同じだ」という時の内容を変える工夫がされていると考えました。こうした表現のちがいによって、わかりやすく簡潔な文章になるのか、具体的で深い内容の文章になるのかが変わってくると思いました。私も、どんな言葉や例えを使えば伝わりやすいかを考えて表現したいです。

④　体験談を語るよさは、その人がその時思った言葉や、発した言葉がリアルに表現されていて、おもしろいことかなと思う。随筆を書いてみると、意外と書きやすかった。理由は、自分の思いを自由に書けるし、「〇〇は〇〇だといっていい」とまねするといろいろ思いついたから。これからも、随筆で学んだことを生かして自分の価値観を自由に表したい。

2　変容したこと（見方・考え方の変化、友達の考えのよさ、自分との違いで気付いたこと等）

①　すごいと思ったところは、一見すると関連もない「言葉」と「桜」を結び付けていたところです。言葉は背後に心を背負っていて、桜は背後に幹を背負っている、「何かを背負っている」という共通点を探し結び付けているところは私には到底できないので、このような表現を使えるようになりたいです。

②　友達の表現で、「頭に電気が走った」「反論に反論を重ねた」「はっとした」が心に残っています。そこから私は、表現から感情が浮かび上がるくらい簡潔で、しかもわかりやすいものは心に残りやすいのかなと考えました。表現一つでも文の印象は変わってくるし、自分の感情を示す一つのものなので、気に入った表現を取り入れて書きたいです。

②　みんなの発表で、書いている内容がちがうから表現の仕方もちがったけど、自分の経験したことを言っているところから、みんなのことをもっと深いところまで知れた気がした。

3　考えたこと（これからの学習方法・人間関係に生かしたいこと等）

①　私は、実際、自分の心に残った言葉なんてないと思っていました。でも、よく考えてみればたくさんあったと思います。私が今回書いた随筆では、自分の心に残っていた「言葉」について深く考えることができ、今では「ああ、あの時にU先生が言ってくれたから、私は変われたんだ」と思いました。随筆を書いたことで、あの時の出来事を思い出して今に生かそうと思いました。このきっかけはとてもよかったと思いました。

②　みんなの随筆を聞いて、本当に「言葉の力」ってすごいんだなと感じました。作者の気持ちが変わったこともわかるし、聞いている私の気持ちまで変えてしまう言葉が多くあったからです。自分の考え方、意見を１８０度がらりと変えてしまう力を言葉はもっているのだと知り、感動しました。

③　初めて「言葉の力」を読んだときは何を言っているのかわかりませんでした。しかし、授業を通して前までわからなかった表現や難しい言葉も理解することができて、読みながら「私にもまだ見えていない世界がたくさんあるんだな」と思いました。私が無意識に発した言葉が、相手にどれだけ深く重くささるのかを考えさせられました。自分は思っていなくても、相手は嫌な気持ちになるかもしれない。言葉の重さを胸に刻んでおきたいです。

④　言葉の力の構成は、話題提示→エピソード→結論となっていて、エピソードが入ることにより現実味が出てわかりやすく表現されていると思いました。実体験から作者が思いが問いかけられているので、こっち側も考えさせられるのだと思いました。結論でも、「～だ」「～です」ではなく、「～ではないだろうか」と作者が結論を出さずに読み手に考えさせる書き方になっていました。言葉は、自分の性格や人柄がわかってしまうので、一語一語に意志を持ってしゃべりたいです。